

# 四戸 とよ (しのへ・とよ)

## 1、プロフィール

歌人。昭和 53 年に短歌結社「かりん」に入会し、馬場あき子に師事。平成 6 年に歌集『海なす雪』を上梓。地元の「野辺地短歌会」にも入会し積極的に作歌活動をする。

<生没>

1919(大正8)年 12 月 22 日～2012(平成 24)年7月 25 日

<代表作>

『海なす雪』

<青森との関わり>

野辺地町生まれ。「かりん青森」「野辺地短歌会」に入会し、地区短歌大会等の選者を務め、後進の育成に尽力した。

## 2、作家解説

四戸とよの短歌は、40 年務めた小学校の教員を退職した昭和 53 年に、同年創刊した中央の短歌結社「かりん」に入会したことから始まる。本格的に作歌を志したとよは、主宰の馬場あき子が良い作品を選考して手直しを加えるコーナーに毎月応募し、表現の仕方に磨きをかけ、自分で推敲する作業を繰り返した。そのたびに本誌への掲載作品も増えていった。地元では、「かりん青森」「野辺地短歌会」にも所属し積極的に作歌に取り組み、10 年余り経て第一歌集を上梓するまでになった。

その歌集『海なす雪』の序文で岩田正は、  
「来る如くはた行くごとく見ゆる影遠き砂浜歩む人あり、死魚は浮き生魚は沈む海にしてこの脈絡の絶ゆることなし、

なにか時間がとまって、ある不確かな映像が、そのままゆらゆらと、永遠にむかって流れてゆく、そんな印象の歌である。作者は野辺地に生れ野辺地に育ち、そ

していま野辺地で歌を詠んでいる。この地と海はこんなふうな思いをさせる。不思議な力をもっているのだろうか」と述べている。

長く小学校の教員であったとよの歌は、幼い子供達と接した体験、その子供達が成長して大人になった姿に暖かい眼差しを向けた歌も多いのが特徴である。

野辺地文化奨励賞の受賞、東奥歌壇、上十三短歌大会、奥南部短歌大会等の選者を務め地域の短歌の普及と後進の育成に尽力した。

また野辺地町教育委員、社会教育委員、教育相談員等教育関係の委員も歴任した。図書館活動にも積極的に参加し、平成8年から図書館サークル連絡会の会長に就任。読書感想文コンクールの審査などにあたり、地域の読書普及を図る等により、青森県図書館連絡協議会功労者表彰を受賞した。

### 3、資料紹介

#### ○『海なす雪』

図書

1994(平成6)年9月9日

195 mm × 135 mm

昭和53年に「かりん」に入会し、10年余りの作品の中から厳選した著者の第一歌集。かりん叢書。短歌研究社より出版。主宰馬場あき子の巻頭歌とその色紙、岩田正の序文、あとがきを掲載している。